2　群獣図　円山応挙

六曲一隻（六曲一双のうち）
江戸時代（十八世紀）
紙本着色　本紙一六八・五×三六四・八

写実を重視して作画活動を行い、円山派の祖として活躍した円山応挙（一七三三～九五）は、動物画も多く手掛けている。その中でも、虎は好んで描いた画題の一つで、竹虎や水呑虎、龍虎などの様々な図様が知られる。

本屏風は十五種類余の動物を描いた屏風のうちの片隻で、中央に虎、そして豹、狗、猪、鹿、猫、熊等を描き、もう片隻には、象や猿、山羊などが描かれる。このように様々な動物を一堂に描く図様は珍しく、十八世紀の博物学の流行を反映した図様と考えられよう。応挙は天明元年（一七八一）の光格天皇即位大礼に際して「牡丹孔雀図屏風」を揮毫したほか、寛政度の内裏造営では障壁画を制作するなど、宮廷関係の御用にも多く携わった。本屏風も宮廷の要望に従って制作されたと考えられる皇室伝来品の一つである。

本図に描かれる虎は、周囲を威嚇しながらゆっくりと前進する姿で描かれ、その鋭い目つきには猛獣らしい気迫が感じられる。応挙の描く虎の表情は、愛嬌のある可愛らしさを感じるもの、落ち着いた風格を感じるもの等、それぞれに描き分けられているが、本図では、様々な動物との対比の中で、虎の威厳を表したものであろう。

応挙が活躍した時期には、同じ京都で虎を得意として描いた岸駒（一七四九～一八三八）がいた。岸駒は、寛政十年（一七九八）に中国商人から虎の頭骨を手に入れ、これに虎皮を被せて写生を行ったという。十八～十九世紀には虎図が流行しているが、これは博物学以外にも、正徳五年（一七一五）に初演された近松門左衛門の浄瑠璃『国性爺合戦』において虎退治を通じて日本人の勇猛さが強調されたり、長崎派の絵師らによって中国・朝鮮画の虎図の図様が紹介される等の影響が重なってのことと考えられる。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

虎・獅子・ライオン
―日本美術に見る勇猛美のイメージ
三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 51

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社 東京美術
翻訳　横溝廣子
発行　宮内庁
平成二十二年七月十七日発行

© 2010,The Museum of the Imperial Collections